



|              |                                                                                     |
|--------------|-------------------------------------------------------------------------------------|
| Title        | 『失われた時を求めて』の召使いたち                                                                   |
| Author(s)    | 原田, 武                                                                               |
| Citation     | études françaises. 1980, 17, p. 1-21                                                |
| Version Type | VoR                                                                                 |
| URL          | <a href="https://hdl.handle.net/11094/93653">https://hdl.handle.net/11094/93653</a> |
| rights       |                                                                                     |
| Note         |                                                                                     |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 『失われた時を求めて』の召使いたち

原 田 武

小説『失われた時を求めて』に登場するさまざまな人物のうちで、召使い、あるいは労働者階級に属する人びとが、主な人物と比べても、きわめて特徴的な姿を見せることは、この作品を読む人のひとしく気づくところであると思われる。小説のはじめから終りまで話者の身边で働く律義で献身的なフランソワーズ、それにヴェルデュラン家の庇護のもとに大貴族シャルリュス氏や貴公子サン・ルーを苦しめ手玉にとるヴァイオリン弾きモレル（彼は話者の大伯父アドルフに仕えていた従僕の息子である）は、おそらく小説のなかでも屈指の忘れがたい人物であり、生き生きとして強い印象を残す。ほかにも、仕立屋ジュピアン、バルベックのホテルの給仕長エメやエレベーターボーイなど、小さな脇役ではありながら、それぞれの人間像と役割に応じて、小説に厚みと色どりを添えている。『失われた時を求めて』という小説を、そのさまざまな側面のうちでも、社会のひろがりのなかで演じられる人間たちのドラマとしてとらえるとき、召使い層に対する関心は、ユダヤ人や同性愛者への関心と並んで、人間を、社会の片隅にある疎外された人たちを含む広い視野において考えようとするあらわれであろう。実際、この小説から使用人の階級をとり去れば、プルーストの人間劇は、その深さと鋭さの少なからぬ部分を失うといって過言でないと思われる。

プルーストにとっての召使いたち、というふうに問題を立てれば、すぐさま彼が実生活において示した、召使いに対する過剰なほどの気前のよさ・依存・気づかいといったものが思い出される。そのことは、彼がホテル

の従業員や運転手たちに与えたとされる莫大な額のチップをめぐる、数々の伝説的なエピソードを通して知られる。ペインターのプルースト伝には、彼が自分の使用人や（Ⅰ，277，Ⅱ，143-144），ホテルの従業員に対して（Ⅱ，319，427）どれほど親切であったかが、しばしば語られている。プルーストがエビアンのホテルを去る日、一人の運転手が来て、「私がホテルへ来はじめてから、あなたほど従業員にやさしい人に出会ったことはありません。私たちはみな、あなたが大好きです。あなたがそんな病気に苦しんでおられるのは本当にお気の毒です。なぜといって、そんな目に会ってはいない人がいるとすれば、それはあなたなのですから」といったという話も紹介されている（Ⅰ，312）<sup>(1)</sup>。召使いに対するこのような態度は、プルーストが日常生活の万般に及んで身の世話をする人をいつも必要としていたことから来るであろうし、このことはまた、小説のなかでの祖母や母、あるいはフランソワーズの役割に多少とも反映されているだろう。

しかし小説自身を問題にするとすれば、話者を中心とする主人階級の召使いへの見方は、いくつもの微妙な問題をはらむように思われる。恋愛も友情も、結局は空しい虚妄におちいるこの小説世界のなかで、主人と召使いの関係が例外であることはできない。召使いというものが、主人の側から見て、きわめて身近でありながら、同時に乗り越えがたい階級の差でへだてられていること。近く、また遠い存在であること。この点からだけでも、召使いをめぐる問題のありようが、いくらか察せられるだろう。

実際、話者をはじめとする主人たちの多くは、使用人に対して屈折した感情、親しみと警戒のまじる二重の心の動きを味わっているように思える。たしかに、「われわれは、このようなかわいそうな小間使いの心に充分身をおいていない」（Ⅱ，777）とか「私はこれまで労働者，ブルジョワ，大貴族の間に差別を設けたことは一度もなかった。彼らのいずれをも，友人として無差別に選んだことだろう。いくらかは，労働者の方が好きなの

だ」(Ⅱ, 1026)といった言葉を作品のあちこちからひろうことはできる。しかし、召使いたちが主人の心を敏感に見ぬく divination の力に驚嘆し、その強い能力にかけては主人はまねができないのだ(Ⅱ, 824-825)と述べられる反面、彼らは主人の生活について断片的な観察を集め、そこから、ちょうど人間が動物の生活について行なうように、しばしば間違った結論をくだすのだといういい方もある(Ⅰ, 696)。また話者は、慣れ親しんだ召使いたちに心を許して、彼らは一種の鏡であり「そこにわれわれの姿が忠実に、また親しみをこめて映し出されるのを見て、くつろぎを感じるのだ」(Ⅰ, 723)と洩らすかと思えば、その一方では召使いはわれわれの生活のなかに入りこむにつれて、かえって彼らの階級に属する人間の限界をあらわにし、「社交界の人間ならけっしてしない変な言葉づかいをするようになる」(Ⅲ, 749)と嘆いてもいる。

主人の側について見ても、一見寛大に見える手のこんだやり方で従僕につらくあたるゲルマント公爵夫人(Ⅱ, 484)のような人のほかに、自然に身についたやさしさでホテルのボーイたちに親切にふるまうパルム太公妃(Ⅱ, 788)や、ことさら平民的な態度を装わないことで召使いへの平等感を発揮するサン・ルーの姿(Ⅰ, 737)が印象にのこりはする。しかし、そんなサン・ルーにしても、ゲルマント家の従僕の一人に向かって、彼とうまくいっていない他の従僕を追い出すための残酷な手口を平気で授けてやることによって、召使いたちへの軽侮の気持を露呈してしまうのである(Ⅲ, 470)。

おそらく、主人の方では召使いたちの巧妙さ、あるいはしたたかさに大いにたじろぐ気持があるのかもしれない。プルーストに出てくる使用人階級の人びとは、概して強靱な生活力で主人を圧するものが多いように思われる。巧妙さといえ、話者は、召使いたちが話者の性格の長所短所をいちやく見ぬき、それに合わせて巧みに自分たちの行動を律する能力をもつことに感じ入っている。

「攻撃の法則は必ず反撃の法則と関連しあうのであるから、私の性格の凹凸によって傷つけられないように、彼らはみな彼らの性格のなかに同一の凹みを同じ場所に刻むのであった。一方では彼らは私の欠陥を利用し、そこに彼らの突出部をはめこませた。(…)私が自分のもつ生来の不変の欠点を知ったのは、彼らがいつも自分のものとしてしまう欠点を通じてであった。彼らの性格は、私の性格の一種の陰画 (épreuve négative) を示していたのである」(Ⅱ, 65)。

作中で旺盛な生活力を発揮する人物としては、むろん従僕の息子として生まれ、シャルリュス氏やサン・ルーの囲い者でありながらも、最後にはパリ社交界の名士におさまる、あのモレルにとどめをさす。また、モレルがなりふりかまわず、その美貌と厚顔にものをいわせて猛進する arriviste であるのに対して、バルベックのホテルの給仕長エメは、金さえ与えれば忠実で、一切の道徳的顧慮をはなれて勇敢に頼みごとを実行する型の男として描かれる (Ⅲ, 492)。さらに、同じホテルのエレベーターボーイですら、なかなかのしたたかぶりを見せる。たとえば彼は、明白な人名の誤りを指摘されながらも、いっこうにそれを認めようとしない。

「それでも彼は、私が間違っているという様子をしたがらないのを見てとり、主人というのは自分たちのもっともつまらない気まぐれでも服従してもらいたがり、もっとも見えすいた嘘でも受け入れてもらいたがるものだと思っていたから、良き召使いとして、今後はカンブルメールと申します、と私に約束した」(Ⅱ, 825)。

彼においては、主人はつねに無理を通すものだという固定観念が、自分の非を相手の非にすりかえる論理に役立つことになる。(あるいは、世間で通用するこういった固定観念を、隠れみのに着ているのかもしれない。)このような論理を立てる限り、彼はいつでも傷つかずにすむのである。

召使いがふつう日常卑近の場で主人に仕えることを思えば、主人にとってくつろぎと、精神的な武装放棄の場であるものが、召使いの側では自分

たちの生活を賭けた労働の機会だということになる。主人がともすれば召使いに足をすくわれるような驚きと恐怖を感じやすいのは、このような立場の相異からくるものかもしれない。ともかく、話者が召使いの言動について語るとき、どうしてもそこに一抹の皮肉がただよってしまうように感じられる。たとえば、話者の家で働く給仕長は、*envergure* を *enverjure* と発音してはばからない。自分は誰の干渉も受けずに *enverjure* と発音する権利を人権宣言から受けついでいるのであり、自分の仕事でない分野について人の命令に従わなくてよいのだ、というのが彼の言い分である（Ⅲ，842）。また、上にみたエレベーターボーイが、自分の語彙から召使い制度に属する用語を極力追放しようとして奇妙な話し方におちいるところが二度にわたって述べられている（Ⅰ，799-800，Ⅱ，790-794）<sup>(2)</sup>。

こういった傾向が押し進められると、召使いの生活というものは、その異常さのゆえに何らかの欠陥（*tares*）を生み出さざるをえないのだ（Ⅱ，64）という考えに行き着く。また、スワンは「召使いはわれわれより劣った状況に生きていて、われわれの財産や欠点に想像上の富や悪徳を付け加え、それでもってわれわれを羨んだり軽蔑したりするのだから、宿命的にわれわれの世界の人間とはちがった仕方で行動するように導かれるのではないだろうか」と自問したりもする（Ⅰ，358）。『ソドムとゴモラ』のなかにも、召使い階級についての同様に手きびしい見方がある。

「エレベーターボーイが絶望のあまり、今にも五階から身を投げようとしているのを見て、私は自問したものであった。もしもわれわれの社会的状況が、たとえば革命の結果、たがいに入れ変わってしまうようなことがあれば、私のためにおとなしくエレベーターを運転する代わりに、彼はブルジョワとなって、私をそこからつき落とすのではないだろうか。社交界では、われわれのいないところで失礼なうわさに興じることはあっても、われわれが不幸になったからといって、態度が急に侮辱的になることはないのだが」（Ⅱ，826）。

このような個所を読むと、バルベックのホテルで、豪華なレストランの  
にぎわいをガラス越しに外から見守る土地の労働者たちの姿にふれて、い  
つの日かガラスの内と外の立場が逆転する日が来るのではないかと気づか  
う、あの有名な場面（Ⅰ，681）を思い出すが、この種の不信あるいは恐  
怖を、プルーストの使用人階級に対する究極的な見方だと断定するには慎  
重でなければならないだろう。「私は〔シャルリュス氏とちがって〕いつ  
も民衆を信用してきた」（Ⅱ，1075）といういい方もまた考慮されなけれ  
ばならない（上のスワンの言葉は、オデットに対する嫉妬の極、どんな人  
間も信用できなくなるという文脈のなかで述べられている）。不信と信頼  
との間をゆれ動きながら、別種の生活原理に対するとまどいを覚えている  
というのが事実であろう。

ただ、召使いが、この小説のなかでブルジョワよりも主として貴族との  
関係で問題にされるということ、たとえばモレルのような男に痛めつけら  
れるのがゲルマント家のシャルリュス氏やサン・ルーであることは注意し  
ておいてよい。モレルがこれほど成り上がっていけるのは、もっぱらブル  
ジョワのヴェルデュラン夫妻の庇護を得ているからであり、物語を追う限  
り、ブルジョワと使用人階級とが結託して貴族たちに対抗しているという  
印象もある<sup>(3)</sup>。話者は「大貴族からは、ブルジョワから望める以上に労  
働者に対する礼儀を期待できるのだ。（…）大貴族は、ブルジョワほどに  
は労働者をあなどっていないのだ」（Ⅱ，1026）と書く。とすれば、大貴  
族は使用人たちにやさしくする分だけ、彼らから乗じられやすいのであろ  
う。問題はむしろ、大貴族のサロンが勢力を失い、ブルジョワのサロンに  
とって代わられていくという小説全体の動き、あるいは小説が反映する社  
会の動きのなかで考えられなければならない。それにしても、それこそ強  
力な *divination*（Ⅱ，824）をもって主人を見ぬき、懸命に生きつづけよ  
うとする召使いたちに比べて、貴族がどんなに無防備であるかを感じざる  
をえない。一筋縄ではいかぬ、したたかなモレルのそばでは、「家系から

三人もの法王を出した」(Ⅱ, 612) 男爵シャルリュス氏の傲慢も、空威張りとししか見えないのである。

しかし、プルーストの小説での召使いのあり方を考えるとすれば、何といっても、老女中フランソワーズを除外することはできないだろう。彼女は話者の母親と並んで、小説の最初から結末にいたるまで物語から姿を消すことのない人物であり、しかも母とちがって、コンブレ、パリ、バルベックと、ヴェネツィア滞在の時期を除けば、ほとんどつねに話者の身边に位置を占めている（とくに、彼がアルベルチヌをパリの自宅に住ませる期間も、母はコンブレに出かけて不在であり、フランソワーズがともに暮らす）。

話者のいう Saint-André-des-Champs のフランス人の血をひくフランソワーズは、古きフランスの農婦のもつ地に足のついた実直さと、頑健な身体をそなえた、まず異論なく有能な女中頭である。はじめはレオニ叔母に、その死後はパリに出て話者の一家に仕え、献身的にこの家族のためにつくして厚い信用を得ている。料理人としての腕前は、客によばれた外交官ノルポワの激賞するところであるし（Ⅰ, 458）、彼女の行き届いた働きぶりは、たとえば祖母の病気のときによく発揮される。

「フランソワーズは、眠らなくてもすみ、どんなにきつい任務でもこなせるその能力によって、限らない奉仕を私たちにしてくれるのであった。そして、幾夜もつづけて働いてから眠りに行ったあとでも、まどろんで十五分もしないうちに起こしに行かなければならない場合、彼女はまるでこの上なく簡単な用事であるかのように、喜んで骨の折れる仕事にかかってくれた。そんなとき、渋い顔を見せるどころか、彼女は表情に満足と謙遜をあらわしているのであった」(Ⅱ, 321)。

しかし、フランソワーズがどんなに骨惜しみをしない献身的な働き手であるとしても、ただ従順なだけの召使いではない。むしろ、忠実で献身的

であればあるだけ、彼女は自らの仕事への自負や自尊心、さらには高慢なエゴイズムをも同居させている。それに、ここにはまた彼女のもつ農婦としてのたくましいエネルギー、《la rudesse insensible de la paysanne》(Ⅱ, 320) が加わってくるから、彼女の行動原理は、自分の仕事への排他的な集中、他の女中に仕事を奪われまいとし、主人といえども自分の仕事に口出しさせないほどの集中というかたちをとることになる。この意味で、自尊心こそ、彼女の性格の一つの核を作っている。

「ところで、パリにおいてすら、人が少しでも彼女の過失をとがめると、彼女は歳のせいで曲がりはじめた身体を誇らしげに、また不機嫌にそらせるのであった。自尊心が媚びられるときにはあれほどつつましく、謙虚で、愛想のよい彼女なのに。自尊心が彼女の生活の大きな動機であったから、フランソワーズの満足と不機嫌は、頼まれた仕事の困難さと直接に比例していた」(Ⅰ, 896)。

実際、話者は幼いころから、このようなフランソワーズの二重性にとまどいつづける。おいしい料理を食べさせてくれる彼女が、平気で若鶏を絞めるのは仕方がないとしても、あれほど働き者で自分の娘や孫には情にあついフランソワーズが、残忍な手口で下働きの女中を追い出すのを見て、少年の話者は、人間の不可解な二重性にはじめて直面させられることになる(Ⅰ, 120-124)。

盲目的な自尊心とは偏狭の別名にはかならないから、彼女の行動は、納得のいかない事実にあつた場合、自分を改めるより、むりやり自分の固定した考え方のなかで処理しようとする傾向をもつ。彼女はたとえば、尊敬する貴公子サン・ルーが共和思想のもち主であるのが腑に落ちない。思い迷ったあげく、「彼は利益のうえでそう装っているのにすぎないのだ。今の政府のもとではそうする方がもうけがいいからだ」(Ⅰ, 779) と結論をくだす。また彼女は、彼女には当然話者の部屋にいてもよいと思えるときに、話者の母から部屋を出るように求められる。この命令にすこぶる不満

なフランソワーズは、わるいのは主人の方だ、これは主人がよく使用人に  
くだすたぐいの理不尽な命令なのだとして、かえって主人というあわれむ  
べき種族に対して《une ironie philosophique》を示すのである。「自分が  
軽視されたと思わないために、彼女は私たちを軽視したのであった」(Ⅲ,  
567)。

ここには、さきにみたエレベーターボーイの場合と同じ種類の発現があ  
るだろう。フランソワーズもまた、彼のようなしたたかさを申し分なく身  
につけているわけである。そのうえ、彼女にはエレベーターボーイにはな  
い農婦らしいたくましさ、神経の太さもある。上に引いた祖母の病気の場合  
でも、彼女は無遠慮に祖母の苦しみの表情を見つめ、知らぬふりをした  
方が思いやりがあるときでも、あからさまに自分の感情を表てに出す。彼  
女のあれほどの働きも、裏を返せば、強靱な無感覚さに支えられているの  
であった。

しかし一方で、フランソワーズのうちにある、義理がたい律義な面を指  
摘しないことには、彼女を全面的にとらえたことにならない。バルベックを  
去りぎわに、親しくしていたホテルの従業員にあいさつをするのを忘れた  
というので、食欲が失われるほど深く悔いる彼女なのだ。「サン・タンドレ・  
デ・シャンの浮彫に描かれているようなフランソワーズの法典からすれば  
(…) なすべきことをせず、礼儀を返さないのは、とんでもないことなの  
であった」(Ⅲ, 16)。そして、どんなに忙しくしていても、あらかじめ頼  
んであった電気工事人が来れば愛想よく応対し、消化によくないとわかり  
ながらもジュピアンのすすめる一杯を断わるべきではないと考えるフラン  
ソワーズは、「こまやかな思いやりこそむかないというコンブレ固有の配  
慮」を外交の世界にも押しひろげる。彼女は、日露戦争が起こったときに  
「気の毒なロシア人」のためにフランスが参戦しなかったのが不満である。  
何ととってもフランスは同盟国なのだし、それは、私たちにいつもあんな  
に親切な言葉をかけてくれた「ニコライ二世に対して思いやりを欠く」こ

とにならないだろうか（Ⅱ，330-331）。

彼女はまた、しばしば同じ使用人階級の人たちに連帯感にみちた同情を示す。そして、下の階の小間使いのためを思って風通しをよくしようとした結果、主人を肺炎にかからせそうになったり（Ⅱ，777）、ホテルの従業員の立場を尊重しすぎたために、話者たちが自由にお湯をもらえなくなったり（Ⅰ，693）することはあっても、フランソワーズは、それこそコンブレの精神を体現した、*délicatesse* に富む一面をもつといえよう。彼女にいつもつきまとう偏狭さ、視野の狭さのおかげで、彼女の律義な行為は、えてして主人たちの迷惑の上に成り立つことになるのだけれども。

強靱で、偏狭なほど誇り高くはあっても、反面律義で情にあつい——このようなフランソワーズの姿に、話者はしばしば困惑を覚えながらも、基本的には愛着の念を失わないように思われる。彼女が召使いの身分でありながら、趣味のよさと品位をそなえていることにふれて、「ちょうど犬のもつ、知的で善良なまなざしを前にしたような」驚きにおそわれるところもある。彼女のうちには、もしかして発現の機会を見失ったすぐれた精神がひそんでいるかもしれないと感じたからである（Ⅰ，649-650）。別のところでは、「彼女がアルベルチーナに働いたあらゆる害悪にもかかわらず、私はフランソワーズを愛した。たしかに間欠的ではあっても、もっとも強い種類の、根底にあわれみをもつ愛情であった」（Ⅱ，778）という言葉も見られる。

さて、作中人物フランソワーズがもちうる作品のなかでの、とくに話者にとってのさまざまな意味のうちで、最初に彼女がコンブレという田舎を代表していることをあげなければならないだろう。

「彼女が私の家にいるのは、五十年前の田舎の空気、農村の社会生活が私たちの家に運びこまれたということであり、田舎の生活の方が旅行者に近づくという一種の逆方向の旅行が行なわれているのだった」（Ⅱ，64）。

プルーストのなかでの自然あるいは田舎の重要さはいうまでもない。小説がしだいにコンブレとのつながりを失い、とくに『ゲルマントの方』での祖母の死以後、ほとんどパリを中心にした社交界に舞台を移していくなかで、フランソワーズという作中人物の形で、コンブレ的なものが少しずつでも維持されるのは意味ぶかいといわねばならない。この点、フランソワーズのもつ一つの意味は、都会の人工的な生活のなかで、根づよいもの、自然そのものの価値を示すことにあるといえるだろう。病身で、感受性が鋭く、あまり現実的な適応性をもつといいにくい話者にとって、このことはとくに重要である。目覚めぎわの、自分がどこにいるのかすらわからない、おぼろげな意識のなかで、正確な時間を教えるのはフランソワーズの役目であった（Ⅲ，123）。話者にとって、フランソワーズは健康な外的自然を体現するもの、ともすれば現実から逸脱しようとする話者の精神を、現実につなぎとめる働きをするものといえるだろう。

このことに関連して、話者が作中で行なうさまざまな考察のなかで、フランソワーズは、彼の意見との対照において、よく彼と逆の意見のもち主としてひきあいに出されることに注意しておいてよい。「たしかに、それらの事件をひき起こした人物たちは、フランソワーズがいうような〈実際の〉人物ではなかった」（Ⅰ，84）といったように、否定すべき意見として、たいていは無邪気な、誤った考えを述べるのにすぎず、いわば一種の道化役をつとめているのだけれども、一つの事実をちがった視点、彼女のような素朴な視点からも眺めさせるところに、プルーストのものの見方の一つの特徴があらわれているといえなくもない。事物について、可能な限りあらゆる観点から眺めるという、いわば相対主義的な傾向がプルーストにつねに存在するのだから。

反現実的な意識と卑俗な現実感覚、高度な推論と素朴な断定——こういったところに、ドン・キホーテとサンチョ・パンサの関係を思いうかべないわけにはいかない。主人と召使いがドン・キホーテとサンチョ・パン

サの関係に立ちやすいのは、古来一つの普遍的な事実なのだろうか。

しかし、コンブレが作中でもつ意味は、何をおいても、それが話者の文学創造の出発点、あるいは源泉をかたちづくるという点にある。それは「私の精神的土壌の深い基層」であると話者はいい（I, 184）、小説はコンブレを発端として、またある意味でコンブレに収斂するかたちで展開する。こういった重要さをもつコンブレが、フランソワーズにあらわされて小説のなかで見えがくれに存在しつづけるということ、これは注目してよい点だと思われる。

ここで、フランソワーズ自身もいくらか芸術家であり、料理の名人であることを思い出す必要がある。『花咲く乙女たち』のはじめの方に、彼女が来客ノルボワ氏のために腕をふるうところがある。「ミケランジェロが八か月間カルラーラの山にこもって大理石の塊を選んだように」材料を吟味し、「創造の熱狂のなかに生き」て、みごとな料理を作り上げる（I, 445）。彼女はまた、パリの種々の有名なレストランについて、表面の名声にとらわれない思い切った評価をくだして、主人たちを驚かせもする。「私たちはしかし、彼女が自分の芸術についての正しい感情と、伝統への尊重を抱いているのを感じたのであった」（I, 485）。

フランソワーズを、コンブレと芸術創造に結びあわせて話者の生活と関係づけるのは、多少性急とみえるかもしれない。しかし、この二人のつながりは、ただ主人と召使いにとどまらない深さをもつように感じられる。たとえば、二人の間には性格的な共通点もある。一家がゲルマント邸に移り住んだとき、新しい環境になじめない神経質な話者は、フランソワーズもまたこの転居から衰弱に近い状態におちいるのを見て、この老女中の心に自分が急に近づくのを感じる。「彼女だけが私を理解できるのだ」と彼は感想をもらす（II, 9）。

フランソワーズがその残酷な行為で人間の裏面を（話者の言葉でいえば「台所裏の悲劇」（I, 122）を）教えることについては上にもみた。彼女

はさらに後年、ジュピアン相手に話者のひどい陰口をきき、他者のとらえがたさについて話者を考えこませる。「いずれにしても、私はフランソワーズが私を好いているのか嫌っているのか、直接の確実な仕方では知ることができないのを理解した。そして、このような〔他者がとらえられない影にすぎないという〕観念をはじめて私に与えてくれたのは彼女なのだった」(Ⅱ, 67)。

一方で気質的な共感があり、他方では手痛い教訓が授けられる、このような人間関係のなかに、母と子のつながりをみつけることは容易であろう。実際、フランソワーズのなかには、話者にとっての母のイメージ、それも現実の話者の母にはない、汚れ役もつとめられるたくましい母のイメージを認めることができるように思う。彼女が話者の心を敏感に見ぬく能力、「私にとって苦痛となるべき物事について彼女がもつ直観」(Ⅲ, 366)については作品のあちこちに言及があり<sup>(4)</sup>、母が子に対してもつ感覚の一面をしのばせるが、もっと興味ぶかいのは、彼女が話者の恋人アルベルチーナについて抱く気持であろう。彼女は早い段階から、この娘について警告を与え(「坊ちゃんはおのお嬢様にお会いになってはいけません。私にはあの方のような性格がよくわかります。あの方は坊ちゃんをさぞ苦しみに合わせることでしょう」(Ⅱ, 788)<sup>(5)</sup>)、娘が話者の家に住むに及んでは、たえず警戒の目を光らせて、ことごとに冷淡な態度で接する。二人の同棲生活の間、話者の母が所用でコンブレに出かけて不在だとされているのは示唆的であるが(現実の母には汚れ役をさせたくなかったのであろうか)、フランソワーズがアルベルチーナにこれほどの敵意を示すのは興味をひく。むしろ彼女には、一種の母親的直観によってこれがどんな女なのかよくのみこめていたのであり、彼の生活が乱されるのを憂えていたのであろうが、もしかして、母親がよく息子の恋人に対して抱くたぐいの嫉妬に近い感情が働いていたのかもしれない。あるいはまた、フランソワーズにも芸術家としての一面を認めるとすれば、話者の芸術創造への道がこの

恋愛事件によってはばまれることを、無意識的にもせよ懸念していたのであろうか<sup>(6)</sup>。

ともあれ、フランソワーズという人物に母親的な導き手の意味を与えることは充分可能であろう。その偏狭ではあるが勤勉な労働によって、農婦的なたくましさによって、人間のとらえがたい矛盾を自ら示すことによって、彼女は陰に陽に話者を教え導いているのであろう。現実の祖母や母がやさしい、いつくしむ母であるとすれば、フランソワーズはしたたかな母であり、この母を終始<sup>(7)</sup> 話者のそばにおくことによって、一人の人間の生育には、むしろ一人の芸術家の誕生には、このような強靱さから学ぶことも必要なのだと作者はいいたいように思えるのだ。

そして、このような母のイメージとともに、フランソワーズ＝コンブレ＝芸術家という結びつきも重ね合わせて考えてみなければならない。彼女は、母であるとともに芸術家でもありうるのだから。小説の最後で、いよいよ作品への決意を固め創造の道を進もうとするとき、話者は現実の母ではなく、フランソワーズを思いうかべる。彼は「フランソワーズに見守られて」仕事をするだろうという。「彼女のそばで、ほとんど彼女のように」。そして、自分の作る作品が、カテドラルではないまでも、せめても彼女が縫う着物のように作られていくだろうといい、彼女が「文学上の仕事には、多くの知的な人びとよりも、ましてや愚かな人たちよりも、もっとたしかな一種の本能的な理解力を身につけていた」とつけ加える(Ⅲ, 1033-1034)。とすれば、コンブレを体現し、母でもある芸術家フランソワーズが、話者が社交界にひたるときも恋愛に我を忘れるときも、小説のなかでつねに存在しているという事実は、話者にとって創造への可能性がまったく失われたわけではないのだということ、希望の糸が絶たれてはいないのだということの保証として、意味をもつと考えることもできる。

Georges Cattaui は、この小説の文章のなかに、フランソワーズの作る自慢料理 la gelée de bœuf の特徴を認めることができるという<sup>(8)</sup>。フラ

ンソワーズ的なものは、話者の感じ方を通じて小説の文体にも姿をあらわすのであろうか。

小説『失われた時を求めて』において、シャルリュス氏やサン・ルーをはじめとする多くの人物が荒廃し、無残に姿を変えていくなかで、フランソワーズはめずらしく最後まで変わらぬ人間像をもちつづける一人である。ほとんど歳をとったという印象ももたない（最後に眼が見えなくなったと書かれてはいるが）。この点はいかにも話者の導き手たるにふさわしく、さらにこうした変わらぬ人間像の上に、農婦上がりのたくましさがつけ加わることによって、彼女の姿は、貴族や上層ブルジョワが多くを占めるこの小説世界のなかで、ひととき異質な、鮮やかな効果を与える。一切が移りゆくこの小説のなかで、そんなフランソワーズは、老婦人でありながら、むしろ若々しいものさえ感じさせるのである。

『失われた時を求めて』での召使たちの姿を考えるのにあたって、もう一つどうしても見逃せないのは、主人階級の男が、よく身分の低い人たちと愛情の関係をもつことである。この種の事例は、小説のなかで数多く見出すことができる。

この点もっとも大規模な展開は、シャルリュス男爵がモレルとくりひろげる一件であるが、そのシャルリュス氏はまた、カンブルメール家のある従姉妹の下僕に社交人のように粹な身なりをさせて、連れ立ってバルベックのホテルに現われる（Ⅱ，986）というようなこともする（このとき、この男が召使いにほかならないことを、慧眼にもフランソワーズは見ぬく）。また、これは本文に発表されず、プレヤード版では注に収められた部分であるが、シャルリュス氏はジュピアンに紹介された車掌にうつつをぬかし、一方で彼に恋着するゲルマント太公妃がむなしく彼を待ちこがれている間に、この何の取柄もない男と夜の街路で密会をして彼女に会いに行こうとせず、彼女を悲しみにくれさせる。グロテクスで滑稽な、同時に痛ましく

もあるエピソードである（Ⅱ，1184-1190）。

そのほか、サン・ルーは、シャルリュス氏と別れたあとのモレルと関係をもつし（Ⅲ，678），早くからエレベーターボーイをも相手にしていたことがエメの口から暴露される（Ⅲ，681）。シャテルロー公爵はイギリス人といつわってゲルマント家の取次役と情事をもち（Ⅱ，636），ブロックのおじニッサン・ベルナール氏は，若い使用人を求めてバルベックのホテルの，ふつうの客には入れないところまで侵入する（Ⅱ，844）。シャルリュス氏のいとこゲルマント太公ヅルベールですら，バルベック近郊の娼家で50フランでモレルを買い，これがシャルリュス氏に知れて，あやうく一騒動おこしそうなところまで行く（Ⅱ，1076-1082）。

目下の相手に愛着を覚えるという点では，話者自身も例外ではない。コンブレの近くのルーサンヴィルの森で，農家の娘の出現を待ち望むところ（Ⅰ，158）からはじまって，バルベックへの車中で牛乳売りの娘に新鮮な魅力を感じたり（Ⅰ，655），バルベックの近在の村で，土地の娘たちに心を動かしたりするところ（Ⅰ，711-714）をいくつもあげることができる。第二回目のバルベック滞在のときには，ピュトビュス夫人の小間使いの到着をしきりに待ちうけるし（Ⅱ，752など），ベネツィアではガラス細工屋の娘をパリに連れてかえりたいと願う（Ⅲ，640）。出入りの牛乳屋や洗濯屋の娘に関心をもつところは『ゲルマントの方』にも（Ⅱ，371），『囚われの女』にも（Ⅲ，139）あり，『逃げ去る女』のはじめの方には，アルベルチヌの家の前で見つけたまづしい娘を家に連れてきて，お金を与えたりした（Ⅲ，432）のがもとで，その子の両親から訴えられ，警察で事情をきかれるところさえある（Ⅲ，443）。

見られる通り，こうした事例は，話者の場合を除けば（作中のかなりの人物が同性愛の傾向を示すのに反して，話者のみは異性愛にとどまっている），すべて男同士の愛情に関係しているから，問題をまず同性愛の点から考えることができる。同性愛という行為の反社会性からいって，あるて

いど金や階級的な威光で自由になる目下の男を相手にするのが、容易で安全な実現への道なのであろう。考えてみると、この小説では男同士の愛が、貴族やブルジョワの相互間で実現することはまずない。それだけ、同性愛なるものの反社会性が意識されているのであろうか。

それに、性衝動の本来のあり方からみて、もともと侵犯という特性をもつ性衝動は、同性愛のかたちをとることによって、ますます鋭く社会の既成の諸条件と対立するようになる。プルーストにおいて同性愛が階級差の侵犯としてあらわれることのなかには、性的倒錯が本質的に社会に対してもつ攻撃性・暴力性<sup>(9)</sup>を認めることもできるかもしれない。

つまりは、これらの事象が教えることの重要な一つは、欲望を通してみた場合、階級の区別がいかにはなく、むなしいかという点である。同性愛の前では、貴族・ブルジョワ・使用人といった区別はことごとく意味を失う。まったく Georges Piroué のいう通り、「ソドムとゴモラの反自然的な親和力の法則によって、社会は解体し、再編成される」<sup>(10)</sup>。観点を少し変えるだけで、人間を構成するさまざまな範疇がぐらつくのであり、国籍はむろんのこと、年令や階級の区別も、男女の差異ですら消去される。ことさら男らしさを誇示する男が同時に女であり（Ⅱ，614）、もったいぶった貴族が下男となり、下男の方が美々しく着飾った貴族となる……。その奇怪な図絵はプルーストの描く人間喜劇の一つの極北であるが、ここに欲望につき動かされる人間の悲惨をみることもでき、人間に関する通常の区別がいかに根柢が薄いかを自覚することもできる。つまりは、表面にとられずに、すべてを相対化していくプルーストの歩みが、ここでも充分に発揮されているのである。

けれども、話者の異性愛の場合も含めて、この問題はもう少し広い角度から眺める必要があるように思える。話者の基本的な課題の一つが人間関係にあること、彼がどれほどまで他者の所有に執心したかを、ここで思い出さねばならない。この点、目下の者への愛は、一種の所有の劇を演じるこ

とだといえないだろうか。そこでは、金と階級差にものをいわせて、少くとも表面上の服従を獲得することができ、他者の支配と愛の成就を夢みることができるのだから。むしろこれは劇にしかすぎず、財力と階級的な権威をかさに着た愛は、あくまで架空のものにすぎない。しかし、愛の不可能を痛切に実感し、かろうじて恋人アルベルチヌの眠る姿に所有の安らぎを覚えるほどの話者の世界にあっては、このような仮空の劇が意味をもたないわけではない。身分の低い人たちへの執着がこれほどひんぱんにあらわれることの一つの意味は、このあたりに見出されるように思えてならない。

主人が召使いに接する場面が、主人にとって一種の精神的な武装放棄であることは前にも述べた。その上、召使いが自分の自由になり、たとえ金と主人の権威にもとづいてであろうと、献身的であること、裏切らないことを期待できるとするなら、主人が召使い相手に抱く愛情のうちには、子どもが母に求める気持に一脈通じるものがあるということもできよう。ちょうどフランソワーズが、話者にとって一種の母親を意味したように<sup>(11)</sup>。

シャルリュス氏とモレルとの事件についても、それはたしかに醜悪な関係にほかならず、教養・洗練・歴史の重みに生きる誇り高い一方と、自分の出世しか眼中にない、きわめて現代的な他方との組合せは歴史の皮肉をも感じさせるが<sup>(12)</sup>、シャルリュス氏はただ欲望の充足のためにだけモレルを相手にしたのではないように思える。モレルとの関係において、彼がどれほどの善意や思いやりをもって接したかは、別れたあと、当のモレルですら彼のことを「少しも悪徳漢という気持でなく、（…）かつて知ったもっとも高貴な考えをもった人、並みはずれた感受性を持ち、一種の聖者のような人」（Ⅲ，767）と感じていることでも知られる。モレルとの関係を通じて、シャルリュス氏は、むしろ倨傲な大貴族の面を含みながらも、そうした表面に隠れた、愛に飢え、孤独な、むしろお人好しといってもよい一介の人間の姿をあらわにしていくのである。金で得られる愛の幻想を求め

て目下の人たちとのつながを追う男たちは、愛も友情も否定されるこの小説世界で、なおも人間の絆にすがり、みじめなほどの努力をあらわしているようにも思えるのだ。

これまでみてきたいくつかの場合において、召使いが主人に対して精神的に（あるいは事実上）優位に立つという点、ヘーゲルの有名な主人と奴隷の弁証法を思い出させるものがある。それこそ、奴隷がさまざまな意味において、主人の存立の条件を形成しているのだ。ここでは、労働という契機はあまりみられないけれども。

ただプルーストの場合、召使いの階級に接することが、主人にとって新しい活力を汲みとる源となるという側面があるように思う。話者にとってフランソワーズが、そのたくましさによって導き手の意味をもつことは上にみた。サン・ルーは、娼婦上がりの、それ自身としてあまり立派でもない女優とつきあうことによって、金銭や地位とは関係のない心情の美と芸術的価値に目を開かれる（Ⅰ，781）。老いていく貴族やブルジョワたちは、使用人たちのなかに一種の若がえりの泉を求めるのであろうか。話者がバルベックへ向かう車中、山間の小駅で牛乳売りの娘のみずみずしい健康な姿に接して、生きる嗜欲をはげしく感じるころはあまりにも有名であるが（Ⅰ，711）、ずっとのちにも、同じく家に牛乳を配達しに来る娘について、話者は「人生への永久の欲望、永久の悔恨を感じさせるもののいくらかを彼女はそなえていた」（Ⅲ，141）と書く。このようにみると、上に列挙したような、目下の娘たちへの話者の関心は、けっして単なる一時的な欲望の問題としてすましてはならない性質のことがらだと思えてくる。上にみた母親的なものの吸収という願いとからみあいつつ、そこにはもしかして、話者の習慣や日常生活のくびきからの離脱、大きくいえば彼の再生にかかわる深い領域がひそんでいるのかもしれないのだ。

(注)

- (1) 同じエピソードは、Jean Mouton: *Proust*, p. 68 にも紹介されている。
- (2) この小説での使用人たちへの主たる関心の一つが、彼らの言葉づかいにあることはたしかである。この点は本論の範囲を出るが、フランソワーズを含めた召使いたちのかなり多くが、一度は言葉づかいの特性を通して眺められ、前後の物語上のつながりなく下僕の書いた手紙が引用される場合 (II, 566-567) のように、人物よりもっぱら言葉への興味が先行している場合も少なくない。
- (3) サン・ルーはまた娼婦上がりの俳優ラシエルにも痛めつけられる。サン・ルー対ラシエル、シャルリュス氏対モレルという組合せを考えれば、荒廃の道を進む二人のゲルマント家の男を尻目に、さして才能があるとも思えない二人の下層階級出身の芸術家が上昇していく、という図式が成り立つことになる。
- (4) 「彼女は、両親や私に起こりうる不愉快なことをいち早く察知するための、私には正体がわからぬ一つの能力をもちあわせていた」 (II, 63)。「現代人より強力な感覚をそなえていた原初の間人たちのように、彼女は、私たちにはとらえられない何かのしるしによって、私たちが彼女に隠そうとしてしている真実を、何でも即座に見破ってしまうのであった」 (I, 29)。なお、フランソワーズについて語られるときには、話者との関係でなくとも、よくこのような説明できない感覚あるいは本能 (I, 650, II, 358, III, 1034 など) が問題となることに気づく。作中のさまざまな人間像との比較において、この点を中心にすえて彼女の人間像を考えることも可能であろう。
- (5) このフランソワーズの予言が正しかったことを、話者はのちになって悟る (III, 112)。
- (6) なお、アルベルチーナはフランソワーズと似通ったところのある女として、「その典型がサンタンドレ・デ・ジャンの石に刻まれている、あのフランスの農家の娘が化身した一人」 (II, 367) として示される。フランソワーズにすれば、自分と共通点をもつからこそ、アルベルチーナという女がよく理解できたのかもしれない。それにしても、通常バルベックの海とのつながりで見られるアルベルチーナにしてもなお、コンプレ的なものをもつのだとすれば、話者におけるコンプレ的基層の強さを、あらためて感じないわけにはいかない。
- (7) 『逃げ去る女』でのヴェネツィア旅行には、フランソワーズが同行したらしい様子はない。母と話者との心理的な葛藤が問題となるこの個所では、フランソワーズの介入する余地はないのかもしれない。
- (8) 「明晰を尊ぶからといってニュアンスが犠牲になることがなく、優美さがほとんどつねに、つつましく見えないままにされており、生まじめなうちにも雄弁やユー

モアが排除されてはいないこの言語——これほど多くの要素、外的な原料が渾然ととけあっているこの言語。これは、フランソワズが作り方を心得ていると《マルセル》のいう、あの牛肉のゼリーに似ている。彼が年老いた下婢に与えるのと同じだけの賛辞を、プルーストに与えることができるだろう」(Marcel Proust, 229)。

- (9) 「性欲を社会的に有用な目的のための手段として利用する社会に対して、倒錯は性欲そのものを擁護する。倒錯はこうして、実行原則の支配の外に位置し、その基礎そのものに挑戦する。倒錯は、生体を仕事の道具に変えてしまう文明の過程を覆そうとして、社会が追放しなければならないリビドー的な関係を成立させる。倒錯は禁止されなければならなかったものの象徴であり、禁止されてはじめて、人間と自然を支配することがいっそう効果的に成しとげられ、組織されたのであった」(マルクーゼ『エロスの文明』南博訳, p. 43)。

- (10) Georges Piroué: *Comment lire Proust?* p. 73.

- (11) この点、作中の話者にとって重要な意味をもつジョルジュ・サンドの小説『フランソワ・ル・シャンピ』が注意をひく。この小説では、母親的な役割をもつ年長の女主人と、彼女の家のために働く使用人格の青年との愛および結婚が物語られる。年令や社会の階層のちがいににかかわらず愛が成り立つこと、また肉親の愛に近いものであっても、男女の愛と等価でありうることを示している点、この小説ははなはだ暗示的といわねばならない。

なお、話者が関心をよせる身分の低い娘たちがよく「牛乳」売りの女であることも、多少気にならなくはない。精神分析的な解釈をもち出すつもりはないが、これらの娘たちがある種の母親的なものをあらわしていることはいえるように思う。そして、祖母、母、フランソワズ、これらの娘たちというふうには、話者をとりまいて母親的なものが、広く、多岐にわたってみられることに注目することも許されるように思う。

- (12) シャルリュス氏とモレルの「恋」について、ペインターはこの展開が話者とアルベルチヌの関係の進行と並行する、「見事で、かつおそろしい対位法」をなすことに注目し (Marcel Proust, II, p. 298), Jean Rousset は、モレルという人物が「性を変えた場合のオデットである」と、きわめて適切な指摘を行なっている (*Forme et signification*, p. 148)。